

思う。現に世界では、いたる所に紛争がたえない。我々は一人一人謙虚に自分の心を見つめて、本当に大切なものは何かを見出し、それに基づいて生きていかなければならないと思う。それがたくさんの犠牲者のおかげで、生き延びられた者たちの義務だと思ふのである。

終戦五十二年目を迎えて

東京都 中村 八郎

はじめに

私自身、昭和十三年三月に渡満して以来、終戦後の昭和二十一年十月に引き揚げるまで、一度も日本に帰ったことがなかったのですが、その間、日本の経済的なことや軍事的なことなど、外交面でのいろいろな動向が、海外にいればいるほど気になるものでした。大東亜戦争が始まって以降、緒戦の大勝に酔い、日本の将来を見失ってしまったのではないのでしょうか。当時の日本人のほとんど全員が、勝利を信じていたことと思

いますが、開戦と同時に日本の敗戦への軌跡が少しずつ敷かれていたことも事実です。

大日本帝国の崩壊

昭和二十年八月十五日、大日本帝国の崩壊の日がやってきました。満州にいた日本人は、最後には勝つんだ、勝つまで戦うのだと歯を食いしばって、毎日毎日を送っていたのです。これは満州ばかりでなく、どこの地域でも同じ気持ちだったことと思います。

私の小学校時代の親友も、中学校で机を並べた刎頸なぐりの友も、みんなこの戦いで死にました。小学校・中学校を通じての同級生、大野竹好君も海軍のパイロットとして壮烈な戦死を遂げたのです。

毎年、終戦の日がやってくるたび、数多くの尊い命の代償として敗戦というあまりにも高価なつけを払ったこと、そしていつ終わるとも知れない運命を背負わされていることに思いを馳せるとき、慚愧ざんきの気持ちで一杯になります。満州その他の外地からの引揚者が、営々として築きあげた私有財産をやむなく捨てて、命からがら逃げてきたのは、一体なんだったのかと、た

だむなしさのみが残っています。

女・子供の内地帰省の動き

戦況我に利あらず、ますます追いつめられて、今や満州も一大決戦のつぼとなる気配が濃厚となってきました。当時私は、満鉄社員として三棵樹鉄道工場に勤務していましたが、父も私のあとを追って渡満し、ハルビンハルビンの関東軍酒保に勤務し、後にハル濱特務機関の酒保に移りました。昭和二十年七月末、満州が一大決戦の場となった場合に、女・子供がいたら足手まといとなるということから、戦火を逃れるために一時帰国させるとのことで、家族全員それぞれハル濱に集結し、八月に入るとハル濱駅前のグランドホテルを全館使用して、引揚げ用の列車の手にあたるようでした。当時の輸送指揮は、ハル濱特務機関の事務方の藤本氏だったと思います。たしか岡山か広島の出身の方のようでした。しかし列車の手配が思うようにはかどらずに終戦を迎えました。

ソ連参戦

昭和二十年八月九日、一斉にソ連軍が侵入してきま

した。琿春コシケン、綏芬河スイフンガ、虎林コリウ、東安トウアン、佳木斯ジャムス、黒河コウカ、滿洲里マンジウリ、孫吳ソンウなどから一挙に入ってきたのです。当時のソ連軍の勢力は約四十個師団で、これに対して関東軍は、在満の十個師団と北滿の三個師団と四個旅団で、中身は教育訓練の不十分な現地召集兵が主力で、今までの関東軍の精銳は、ほとんどが南方、中支、台湾に転出しており、留守部隊といった方が適切ではなかったでしょうか。

戦火を逃れて、一路ハル濱に

ソ連が参戦し終戦までの一週間、戦火を逃れ、取る物も取りあえずに、体一つで南下した開拓団約二十七万人が、それぞれ思い思いの地にひとまず足を休めました。ハル濱は、その中継点であり、かつ中心地ではなかったかと思えます。途中で中国人の暴動に遭い、ソ連兵のダワイ、略奪に襲われました。

終戦・ソ連軍ハル濱に無血入城

八月十五日、とうとう戦いに敗れて終戦。早くも午前中にソ連軍は市内に入場、軍施設、行政機関、鉄道、通信機関に、もの見事にソ連の国旗が掲げられまし

た。哈爾濱飛行場におりたったソ連軍が、それぞれの機関を接收するのに、二時間と手間がかからなかったのではないでしようか。

八月十七日には、戦車、装甲自動車によって哈爾濱入場のデモンストレーションが演出され、赤毛の兵士が赤旗を振り、両腕には戦利品としての時計が巻きつけられておりました。囚人番号ではないかと思われる入れ墨の番号に、背筋に寒さを覚えました。この時計も国境から哈爾濱までの進撃中に、日本人から取り上げた物のようでした。哈爾濱の郊外は特に軍事施設が多く、数多くの部隊があり、その近くには、軍人・軍属の住宅が軒を連ねていましたが、ここが中国人に一番狙われ、暴動化して、家の中の家具や衣類が略奪されました。またソ連参戦から、北満にいた開拓団の婦人・子供が連日哈爾濱へ列車を乗り継ぎ、または徒歩でやってきました。

このようなパニック状態の中で、一番欲しいのが正確な情報でしたが、これがなかなかつかめず、私を含め大勢の満鉄社員も、哈爾濱鉄道総局に行つて情報の入

手に努めました。しかしこの時期にわかったことは、

「満鉄社員と電々社員は職場に復帰せよ」との、ソ連軍司令官の通達でした。私の満鉄社員の身分証明書には、ソ連軍の署名があり、今となつては私の宝物です。

日本人男子狩り

八月二十日ごろから逃亡兵を逮捕するという名目のもとに、家宅捜査が続きました。これを逃れるために、男子は屋根裏に隠れたものですが、約十日間ぐらい続いたでしようか。

当時は、日本人の写真帳には友人や家族・親戚の兵隊の写真が貼られていましたが、これを取り出して老人や未成年の子供に、「これはお前の写真だ」と難癖をつけ、反発すると裏で銃殺するといったニュースも聞かれたものでした。

私も父親と特務機関の家族の一員として、哈爾濱のグランドホテルの一室で引揚げの口を待っていました。二十一日ごろソ連軍がやってきて、「男子は全員ホテルの前に並べ」とのこと、なお「女・子供は、手に持てるだけの荷物を持って部屋の前に出る」とのこ

とでした。ホテル前に並んだ男子は、そのまま哈爾浜の駅前から中央寺院を通り、香坊の駅にある日本軍の兵舎に徒歩で連行されました。このような列は、哈爾浜のあちらこちらから多数連行されてくるのが見受けられました。香坊に着いたところ、兵舎の中はすべて連行された日本人であり、牡丹江に連行するための列車待ちでした。男子が連行され、拉致されたために、ホテルに残った女・子供の集団は不安の毎日であったことでしょう。あとで聞いたことですが、ホテルはソ連軍が接収し、女・子供は近くの満鉄の社宅に分散したそうです。一方、香坊の男子は、朝が明けると無蓋列車に乗せられて、牡丹江に連行されました。一駅進んでは二〜三時間待ち、途中阿城の駅に着いたときは香坊をたつてから四日目ぐらいたったと思います。この阿城の駅までが哈爾濱鉄道局の管内であり、これから先が牡丹江管内であるために、この列車で輸送された人の中で、満鉄社員と電々会社の社員が結束して、自分たちが持っている身分証明書を提示して、哈爾濱の職場に戻るよう輸送列車の隊長に申し出て、再び哈

爾濱に帰ってきました。この間、一週間でした。

阿城に待機していたとき、一列車が構内に入ってきました。全員が日本軍なのです。一部隊丸ごとシベリア行きではなかったでしょうか。この中に私の従兄弟の姿を見掛けました。得田之雄といって、入隊したばかりの新兵なのです。父親は、甥の丸腰の兵隊姿に、あまりにも偶然に出会ったことに驚きました。私が「満鉄社員として父親を連れて哈爾濱に帰るから、お前も来ないか」と言ったところ、「部隊行動を共にしているから」と、この構内で決別をして、彼らの列車を見送りました。

私が父親と一緒に哈爾濱に帰るということで、特務機関の男たちからそれぞれの女房に「元気でいるから心配するな」との伝言を頼まれました。それを胸に哈爾濱に戻りましたが、既にホテルには日本人の人影がなく、ソ連軍人ばかりでした。近くに分散していた家族を捜すには、それほど時間はかかりませんでした。女・子供だけの集団の中に私たち二人が帰ったものですから、皆の安心した声で大変でした。奥様たちに

「牡丹江の方に連行されたが、皆元氣だ」と伝えまし

たが、この一週間の間に私たちの身体検査が何度やられたか、その度に隠し持っていた金品が全部取りあげられたことを藤本氏の奥様に報告しました。この女・子供の一行も、全員内地に帰るために当時の日本円で百万円用意してあったと聞きましたが、ここにもソ連軍が毎日家宅捜査にやってくるというのです。「いざれソ連兵に取られる金なら、十万円持っていってください」と分け与えられました。

私たち親子と家族も、この十万円を持って馬家溝の満鉄社宅にいる姉杉江の所に落ち着こうということになり、馬車に乗って姉の住む社宅に移りました。姉の夫杉江秀太郎は、満鉄消費組合生鮮食糧魚菜部に勤務していましたが、七月の末に召集をうけ、当時三十五歳でしたが、吉林の部隊に入隊したそうです。ここで終戦間際にアメリカ赤痢にかかり入院、終戦の声を病院で聞きましたが、軍医のいうことに耳を貸さず、吉林から哈爾濱に戻って合流することができました。

日本難民救済会

連日、北から大勢の日本人が難民として哈爾濱に集結し、その数は毎日毎日ふくれあがるばかりでした。

しかもこの人たちは、着のみ着のままの人たちで、ひとまず道裡の桃山小学校、馬家溝の花園小学校、そのほか日本の寺院などあらゆる場所に収容しました。この多くの逃げてきた人たちの食糧の補給に、哈爾濱の日本人が、手持ちの日本円や余分な金の募金を始めました。これは多くの人たちを救済するためのもので、

この金額は帰国したら日本政府が日本国債として保証するといった趣旨のもとに金を集め、日本難民救済会（道裡）に持参しました。また私たちも満鉄消費組合の仕入れのルートをたどり、先の十万円を基金として、哈爾濱駅で日本難民救済会の看板を掲げ、奥地から命からがらたどり着いた人のため、また哈爾濱在住の人でも買出しにも行けない人などのため、日本人の食糧補給を始めたのです。当時、米一升は一円二十錢ぐらいだったでしょうか。しかし毎日毎日物価が値上がりして、年末のころは七、八円になったと思います。近

くの部隊から持ってきた大八車に食糧を載せ、日本人の集団生活をしている所に売り歩きました。奥地から哈爾濱にたどり着いた人からも、駅頭で食糧の入手ができたことに大変喜ばれたものです。

人身御供

満鉄社員の家族が、佳木斯電話局から哈爾濱に着いたのは、九月の初めのことだったと思います。連日のごった返す哈爾濱の列車ホームでの出来事でした。中国人の子供がどさくさ紛れの中で、日本人の荷物をかっぱらったのです。これを見た日本人の男の子が、この中国人の子供を殴ったのがきっかけで問題が大きくなりました。ソ連兵がやってきて、「敗戦国の日本人が殴ったのがけしからん、本人を出せ」。そのうちに「問題の解決については、女を二人用意せよ」という難題でした。この一行の中には、年頃の交換手が大勢いましたが、この中の二人が「皆が助かるならば、私が犠牲になる」と申し出ることによって、全員難を逃れたということでした。

連日連夜の自宅捜査

北満の冬は早い。十月ともなると零下の声が聞こえてきます。どんな目的か知りませんが、マンドリン（機関銃）を抱えたソ連兵が二三人でやってきました。昼は満鉄社宅だという立て看板が掲示されており、生命財産が保障されているはずなのに。夜になると……。目的は金と女なのか。狙われた家は無駄な抵抗を避けて、押入れの奥から隣へと、また天井から二階に抜ける穴を作り、そこから身の安全だけを図って逃げました。入られた家は災難です。家中めちゃくちゃに荒らされ、破られた窓硝子の補修が追いつかぬ状態でした。彼らが来るとわかると、社宅の全員で金目のブリキなどをたたき、大声でわめきました。彼らも少々おっかなびっくりで、小遣い稼ぎのつもりでくるのですが、目的が達成できぬ腹いせに窓を目がけてピストルを撃ち込んできました。私自身も今まで使用していた弁当箱の身と蓋とを夢中でたたいっていました。蓋の方がショックと共にふっ飛びました。鼻先でたたいっていた蓋に弾が命中したのです。その瞬間、へたへたと腰が

砕け、全身に震えがきて脂汗がどっと出ると共に声が出なくなりました。一時間もたったでしようか、辺りがまた元のしじまに戻り、部屋の中にピストルの弾が三個落ちていました。生死と恐怖の一時間でした。

凍死・病死・餓死

昭和二十年が過ぎ、昭和二十一年がやってきました。この零下三十度を越す冬空、着のみ着のままの開拓団の人々、うちの前の花園小学校でも連日死者が出ました。一体、二体と、毎日毎日の処置ができずに死体の山となりました。トラック一台分になると、処置係がやってきて、どこかに運び去られました。この方々に運ばれた遺骨が、今に至るまで祖国に帰れず眠っていることを思えば、まだ戦争が終わっていないことを痛感します。この祖国に帰る日を待ちわびて眠っている同胞の数は、数千、否、数万をこえるでしょう。

ソ連軍の撤退

四月になると、ソ連軍はシベリアンを残して、哈爾濱の街から姿を消しました。それと同時に、蒋介石隷下の正規軍が入ってきました。相変わらず治安が悪く、

どこからともなく、八路軍と交戦しているとのニュースが伝わりました。第二松花江の鉄橋が爆破されたとのこと。それと間髪を入れずに八路軍が哈爾濱に入ってきました。八路軍を礼賛するわけではありませんが、前の政府軍と比較すると、軍規といい、装備といい、月とスッポンのような違いでした。

内地引揚げ

八月になって、敗戦からちょうど一年がたちました。初めて味わった敗戦の惨めさ。そしてこの一年間、戦争中に体験した以上に虚無感に襲われ、多くの日本人は戦場が首になり、いつ引き揚げるのかわからぬ日々を悶々の中に送り、毎日毎日に閉じこもって、三三五五集まっては花札をしていたようです。やるせない気持ちに、度の強い老酒を、心の痛手を忘れようとおおり、零下何十度という寒さの中で足をとられて路上に眠り、手足が凍傷となって手足の切断の手術により一命は助かったものの、達磨さんとなって引揚げてきたという話もあります。

私たちの引揚げ業務が開始され、哈爾濱の駅に集合

したのが八月三十一日でした。各人が一万八千円まで持参することが許されました。これは、内地上陸と同時に、日本円が千円支給されるので、乗船地壺蘆島までの途中の生活費だとのことでした。周りの人々の中には、一年間のうちに、ダワイにあったり、家にソ連兵が捜査にきたり、売り食いでつないできた人たちが多く、この一人当たりの一万八千円が工面のできない人が多くいました。内地につけば千円は必要がないという人たちに、この一年間に商売をして残した金が五十万円ぐらいあったので、博多上陸時に日本の新円千円をこちらにいただくという条件で、約三十人の人に一万八千円を渡しました。

難民救済の仕事をした人々は、私の家族、柿杉江一家、そして満鉄の同じ棟の五島一家（長崎五島列島）、対島の原一家、山口県の島本君、それに同郷で哈爾濱で軍属をしていた表一家でした。

哈爾濱で列車に乗り込んだ一行は、先にも述べたように、第二松花江の鉄橋破壊のため、松花江の手前の駅で下車、徒歩で松花江まで行き対岸まで船で渡り、

先の駅まで歩く強行軍でした。この間に私が強く胸をうたれたのが、栄養失調で幼い命が消え、その親が泣く泣く道端に穴を掘り埋めて、我々一行に遅れじとついてくる姿でした。奉天を経由して、壺蘆島まで割合に順調にきました。途中の止まった駅構内での用便、監視の兵隊の難癖、ひたすらに耐え忍んできました。壺蘆島につくや、馬小屋のような建物に収容され、D T Tなどを頭から背中までふりかけられました。

いよいよ明日乗船、内地に帰還できるといふ知らせがあり、港まで出発しましたが、直前にコレラ患者が発生したということで一週間隔離されました。

やっとの思いで乗船しましたが、途中の食糧が十分でないため、船の中で死んでいく人が何人かいました。最初はドラの音の合図と共に、その周りを三回まわりましたが、二人目からドボンと投げ捨てて水葬としました。博多上陸の日が待ち遠しいものでした。三回の検便の上、保菌者がいなければ上陸できるという最後の検便の日に保菌者が発見され、また沖に係留、一週間後の後に日本の土を踏んだのです。夢にまでみた日本

の土地、国破れても安心のできる母国、哈爾濱をたつてから四十二日の長い長い道中でした。

終戦から五十三年、若かった私自身が七十七歳となりました。あの時、肌身離さずに満州から持って帰った満鉄の「身分証明書」と引揚げの時に渡された「引揚証明書」は、遠く海外から引き揚げてきた苦難を語る歴史の証しではないでしょうか。

私の引揚記

神奈川県 中塚 幹子

あこがれの満州へ

私の家族が初めて満州に旅立ったのは、満州事変直後の昭和八年の春でした。父は、当時大阪鉄道株式会社（近鉄の前身）の社員で、土木建設技師として鉄道敷設関係の仕事に従事しておりましたが、もっと自分の持っている技術力を生かせる仕事をしたいと日々考えていたようでした。たまたま、満州国の鉄道建設の

ための技術者招へいの話があり、これは自分の希望にぴったりだということで、一大決心のもと一家を挙げて、満州に赴任することとなったのです。

勇躍、神戸港から大連に向かっての船旅を開始しました。大きな船でしたので瀬戸内海は静かに過ぎましたが、名にしおう玄界灘に差しかかったころから時化がひどくなり、船酔いで苦しんだことを臙気ながら思い出します。

父は大連に着いてすぐに、南満州鉄道の技術社員として活動を開始しました。その時、私は五歳になったばかりでしたが、子供心にも満州の広さにはびっくりしたことを思い出します。

父は、その仕事柄から北滿一帯に出張することが多く、留守がちの毎日でしたから、母は私と、私よりも三歳年下の弟との二人の幼い子供を抱えて、家事をきりもりしていました。まだ周囲の環境にも十分慣れていない大連の社宅で、夫の留守を守っての生活は、さぞ大変だったことと思います。しかし、日時がたつに従って生活にも大分慣れて、小さい二人の子供を連れ